

猫と文学 — その壺（ヨーロッパ篇）

松本 舞

序 猫をめぐる

小泉八雲と猫

島根県松江市の小泉八雲記念館 (fig. 1) には、ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904、帰化後は小泉八雲) が息子の一雄に英語を教える際にハーン自身が英字新聞の上にも書いた、「猫はねずみを食らう」(“The Cat eats a Rat”) という英語や、猫の絵と‘CAT’という文字を並べて書いた資料などが残っている (fig. 2)。¹



fig. 1

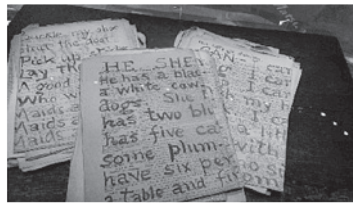


fig. 2.

また、多くの猫を観察してきたハーンは「病的なこと」と題された随筆の中で、自分が飼っている三毛猫の「玉」について以下のように描写している。²

私は猫が大好きである。さまざまな気候風土とさまざまな時節に私がこの地球の表側と裏側で飼ってきたいろいろな猫について、一冊分厚い書物がかけるのではないか、と思っているほどだ。・・・玉というのは英語で **Jewel** という意味である。私たちがそう呼ぶのは玉の美しさの故ではなく一玉は実際美しいが一玉という名前は日本でふつう飼う猫につけられるからである。この三毛猫、英語でいうところの **tourtoise-shell kitten** は日本ではどちらかと言えば珍しい。日本のある地方は三毛猫は縁起のいい猫で、鼠だけでなく魔物を追い払う力があると信じられている。玉はいま二歳である。玉には外国の血が流れているのだと思う。日本の他の猫よりももっと優雅ですらりとしている。そして大変長い尾をしている。これは日本の見地に立つと玉の唯一の欠点ということになる。玉の先祖の一匹はおそらく家康の頃にオランダ船かスペイン船に乗ってきたのであろう。しかし先祖がいかなるものであれ、玉はその習性において完全に日本の猫である。たとえば玉は米の飯を食べる。³

玉は尾が長く、玉には外国の血が流れているとハーンは考えた。ハーンは、当時の日本人はみな「子猫の時に猫の尾を切っておかないと、大きくなって猫股という化け物になる、

と信じている」とも言っている。⁴猫がもつ神秘性や、猫が背負う運命は、ハーンにインスピレーションを与えた。日本の外来猫は、江戸時代に貿易船に乗ってきたのだろう、とハーンが考えているように、猫たちは外交や貿易とともにあった。特に、船でのねずみ捕りとしての役割が重宝された。「先祖がいかなるものであれ、玉はその習性において完全に日本の猫である」という表現には、日本という異国の地で慣れない生活を続けるハーンの羨望のようなものも感じられるが、ここでハーンは、西洋の猫と日本の猫という二種類の猫と、彼らを取り巻く人々、その文化を見ている。ハーンが言うところの、「外国の血が流れている猫」とはどのようなものだろうか。まずは外国の猫の現代の実態を見てみたい。

イギリス政府の公務員猫と動物保護活動

例えば、イギリスでは、猫の公務員なるものが存在する。給料は年間 100 ポンド。「ネズミ捕獲長」(Chief Mouser to the Cabinet Office) という職務で、ラリー (fig. 3) という名を持つ。⁵



fig.3

首相官邸周辺のねずみ被害に悩まされていたイギリス政府は、1929 年頃からねずみ対策のために猫を公務員として雇うようになった。イギリス国内で、政治家がねずみ対策のために猫を連れているのは、古くはヘンリー 8 世のもとで政治を行ったトマス・ウルジー (Thomas Wolsey, 1475-1530) にまで遡る。⁶ラリーの職務怠慢のために、現在は、パーマストンなど、他の猫もネズミ捕獲のための公務員として雇われている。時には縄張り争いなどが勃発し、インターネット上で言及されることもある。⁷猫は家につき、人にはつかない、とよく言われる。⁸ねずみ捕獲長の場合でも例外ではなく、例えばキャメロン前首相が官邸を去る際にもラリーは首相官邸に残った。⁹

ラリーとパーマストンらはともに保護団体 Battersea Dogs & Cats Home の出身である。¹⁰イギリスは動物愛護先進国といわれるように、動物を保護する法律が数多く制定されている。1824 年には英国王立動物虐待防止協会 (The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals) が設立され、動物の虐待を取り締まる活動が始まった。1911 年に「動物保護法」が制定された後は、イギリスの動物愛護の対象は、牛や馬などの労働力として扱われる動物から、猫や犬など愛玩動物へと拡大し、動物愛護の精神もイギリス国民の間に浸透していった。1915 年には「ペット動物法」が制定され、動物の売買には許可が必要になった。2006 年には新たに「動物福祉法」が定められ、適正な住環境を用意する義務な

ど、飼い主に対する法的義務が生じるようになった。

しかしながら、法律によって豊かな生活を営む権利が人間と同じように保障されている、イギリスの猫たちがこのような地位を獲得するまでには、長く暗い歴史があった。

I. 猫と墮落

猫は、初期近代のヨーロッパにおいて墮落した動物であると捉えられてきた。例えば、アルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer, 1471-1528) の版画作品『アダムとイブ』(*Adam and Eve*, 1504) (fig. 4) の中では、猫は、弱肉強食という墮落した世界の到来を表すものとして表現されている。¹¹ この作品の中では、アダムとイブの足元で、猫 (fig. 6) がねずみ (fig. 5) に今にもとびかかろうとしている様子が描かれている。



fig 4



fig. 5



fig. 6

また、フィレンチェのオンニッサンティ教会に所蔵されている、ドメニコ・ギルランダイオ (Domenico Ghirlandaio, 1449-1494) 作の『最後の晩餐』(*Ultima Cena*, 1480) (fig. 7) では、これからイエスを裏切ろうとするユダの足元に猫 (fig. 8) が描かれている。



fig. 7



fig. 8



fig. 9

ギルランダイオが示した、ユダと猫との関連は、さらに、ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂のフレスコ画の一つである、コジモ・ロッセッリ (Cosimo Rosselli, 1439 -1507) の『最後の晩餐』(1481-1482) (fig. 9) の中で反復されている。この作品の中では、ユダの足元で犬と猫がいがみ合っている。神に対して忠実なキリストを暗示する犬と、神への裏切りを暗示する猫が対峙しており、キリスト対ユダの構図が犬対猫の構図として示されている。これらの樂園追放や最後の晩餐の場面においては、神に対する裏切りや墮落がまさに到達しようとする、その瞬間に、猫が描かれている。

このように、15-16世紀のヨーロッパ世界においては、墮落と、ひいては悪魔的なものと猫が密接に結び付けられていたことがわかる。では、なぜ、猫は邪悪なものともみなされるようになったのだろうか。本論では、猫が家畜化され、神聖化された古代エジプト文明の時代に遡り、悪魔として敵視された13-14世紀のヨーロッパの猫たち、さらに、猫を始めとする動物に関する文献が発表された17世紀イギリスまで、猫の捉え方の変遷を見ていくことにしたい。

II. 古代エジプトにおける猫

猫と神

猫が家畜化されたのは、紀元前2000年頃、エジプトにおいてとされている。古代エジプト文明の初期においては既に穀物を貯蓄するための倉庫が作られており、貯蔵庫に貯めた穀物は野ねずみや家ねずみを寄せつけ、そのねずみたちを退治する役割を猫たちは担っていた。猫は倉庫を荒らすねずみたちだけではなく、邪気をもつ悪魔的要素を追い払うことが期待された。



fig. 10

パピルスには猫に姿を変えた太陽神ラーが、敵である闇の蛇アベプを殺す姿が描かれている (fig. 10.)。巨大な蛇であるアベプの頭をラーが二つに割り、体を切り刻み、その骨を砕くのである。

食物を荒らすねずみや、時には蛇など邪悪なものを追い払う猫を、エジプトの人々は、聖なる動物としてとらえた。イギリスの動物学者エドワード・トプセル (Edward Topsell, 1572-1625) は、「猫について」 ('Of the Cat') の中で、エジプト人は猫を神聖な動物としてみなしており、時には猫を神殿の中に囲ったことを述べている。

[. . .] the Gods put upon them the shapes of Beasts, and the sister of *Apollo* lay for a spy in the likeness of a Cat, for a Cat is a watchful and wary beast seldom overtaken, and most attendant to her sport and prey: according to that observation of *Mantuan*:

*Non secus ac muricatus, ille invadere pernam,
Nititur, hic rimas oculis observat acutis.*

And for this cause did the *Egyptians* place them for hallowed beasts, and kept them in their Temples although they alleadged the use of their skins for the cover of Shields, which was but an unreasonable shift, for the softness of a Cats skin is not fit to defend or bear a blow[.]

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts* [1607], p. 80)

また、エジプトを旅した歴史家ヘロドトス (Hēródotos, B.C. 485-420) の記述の中では、猫が死んだ際にはエジプト人たちは哀悼の意を捧げ、眉を切り落としたとも述べられている。¹²

バステト信仰

このような風習は、猫をバステトという神として崇める姿勢へと導いた。大英博物館には、多数のバステト像 (fig. 11) が所蔵されている。



fig. 11

バステトは猫の頭を持つ。暗闇の中で目が見える猫の目は、夜になって地平線の下太陽をも見通すことができると考えられた。バステトは夜のあいだ、太陽神の目の役割を果たすために、月の象徴にもなった。暗闇の中で光る猫の目は、人間には見えない太陽光線を反射したものとして捉えられた。¹³ 夜になると、目の中に太陽を置くバステトは、太陽によってあたりを警戒し、闇に潜む天敵の蛇の頭を傷つけ、爪をつきさすとも考えられていた。このことから、バステトは、「引き裂く者」(‘the tearer’) の意や、「分裂させる者」(‘the render’) の意も持ったとされている。¹⁴ バステトは、太陽の象徴と月の象徴の二つの側面を持っていたと考えられている。

猫のミイラ

特別な猫が死んだ時には、その神聖さを表すべく、ミイラにされることもあり、大英博物館では数多くの猫のミイラが保管されている。(fig. 12, 13)。ミイラは多種多様で、二色刷りの麻布で巻かれたものや、棕櫚の葉を使って耳のように見せているもの、クリスタルを目にはめ込んだもの、黒曜石で瞳孔を作ったものや、猫型の棺に納められたものなど、様々である。¹⁵



fig. 12



fig. 13

エジプトの人々がいかに猫を神聖化していたかは、ディオドロス (Diodoros Sikkheliotees) の記録の中にもみられる。紀元前一世紀にエジプトを旅行したディオドロスは、アレクサンドリアで猫を殺したローマの兵士が群衆に捉えられたことを指摘してい

る。¹⁶ ローマの兵士にはローマ市民としての特権が与えられており、ローマの復讐を恐れたエジプトの国王がローマ兵を殺さぬよう、便宜を図ろうとしたが、このローマ兵は猫を殺した罪でエジプトの人々に殺された。¹⁷

猫の神格化の危険性

エジプト人の猫信仰は、時には、戦争に利用されることもあった。聖なる猫たちは闘いの武器として機能した。古代エジプトの軍隊とペルシア軍隊の間で起こった、ペルシウムの闘い (B. C. 525) では、アケメネス朝ペルシア帝国のカンビュセス 2 世 (在位 B. C. 529-522) が、エジプト人にとっての聖なる動物である猫を盾に縛り付けて「猫の武器」を作った。ペルシア軍は、エジプト人の猫に対する崇拝を逆手にとって、難攻不落とされていたエジプトを征服したのである。¹⁸

このように、古代エジプト人は、猫の中に神聖な力を見出し、同時に、破壊的な悪魔的な力をも見出した。時には猫の神格化が逆手にとられることもあった。そして、この猫に与えられた力は、キリスト教の布教において利用されることになった。

III. 魔女と猫

ローマ教皇と猫

過剰なまでの猫の神格化は、異教の神を排除しようと試みるローマ教皇たちに敵視された。ローマ教皇グレゴリウス 9 世 (Papa Gregorius IX, 1143 年? - 1241 年) は、魔女を含めた異端者が黒い雄猫の形をした悪魔を崇拝したことを問題視し、猫反対の連合運動を推進した。グレゴリウス 9 世が定めた「新版教令集成」(*Nova Compilatio decretalium*) の中では、猫はサタンの化身であり、邪悪な動物と定義された。後に、インノケンティウス 8 世 (Innocentius VIII, 1432-1492) の治世になると、『魔女に与える鉄槌』(*Malleus Maleficarum*, 1486) の元で魔女狩りが行われ、猫をつれている魔女たちが火あぶりの刑になった。

familiar としての猫

1618 年の魔女裁判の様子を記した *The Wonderful Discoverie of the Witchcrafts of Margaret, and Philip Flower, daughters of Joan Flower Neer Bever Castel* (1619) と題されたパンフレットの表紙には、三人の魔女が黒猫を連れている様子が描かれている (fig. 14)。¹⁹

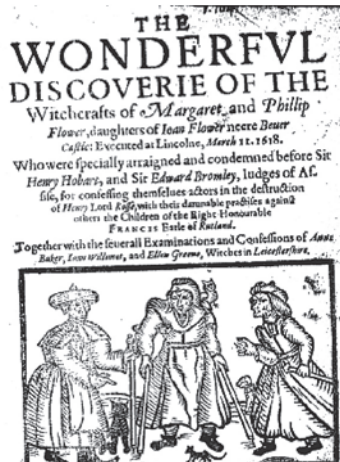


fig. 14

魔女たちの手先は ‘familiar(s)’ と呼ばれ、以下のトプセルの表現に見られるように、魔女の手先は猫の形をとると考えられていた。

The familiars of Witches do most ordinarily appear in the shape of Cats, which is an argument that this beast is dangerous to soul and body.

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 83)

魔術の恐怖におびえる人々は、自然現象を魔女の仕業とみなした。人間を襲う不幸や疫病は、有害な魔術師たちがもたらしたものであると考えられた。その一つが、ペスト（黒死病）の流行であった。

ローマ教皇たちが猫を虐殺したことで、ペスト菌を媒介する鼠が増え、ペストの流行をさらに拡大させることとなった。しかしながら、中世のヨーロッパにおいては、ねずみではなく、猫こそがペスト菌を媒介すると考えられていた。以下のトプセルの文献にも顕著に表れているように、17世紀に至るまで、その考え方が修正されることはなかった。

They [=cats] are dangerous in the time of Pestilence, for they are not only apt to bring home venomous infection, but to poison a man with very looking upon them.

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 83)

ここでは、猫は、ねずみを捕まえることによって毒におかされた汚染物質を持ち帰るだけでなく、猫が人間を見上げるだけで、人間に毒をもたすと考えられていたことが示されている。

猫に化ける魔女

魔女裁判において罰が課される際には、魔女や魔王たちが猫の姿を取ることによって呪いをかけた、と告白していることが多い。例えば、1607年に、魔女イゾベル・グリアソン

(Isobel Grierson) は火あぶりの刑になったが、その罪状は、スコットランドのプレストン・パンス (Preston Pans) に住む、アダム・クラーク (Adam Clark) とその妻の家に、彼らの飼い猫の姿をとって侵入したというものであった。その際に魔女は多くの猫や魔王を伴っていた。また魔女イゾベルが、同じ町のブラウン家に侵入した際にも猫の姿であり、ブラウンは魔女イゾベルにかけられた病が原因で死亡した。²⁰

スコットランドで魔女として名をはせたイザベル・ゴウディー (Isobel Gowdie) は、魔女裁判で、魔女が猫に化ける際に、次のような詩を口ずさんでいたことを告白している。

I shall goe intil ane catt,
With sorrow, and sych, and a black shott,
And I sall goe in the divellis nam,
Ay will I com hom againe.

そして猫から人間に戻る際に唱える詩は以下のようなものであった。

Catt, catt, God send thee a black shott,
I am in cattis liknes just now,
Bot I sall be in womanis liknes ewin now,
Catt, catt, God send thee a black shott.

神が魔女に与える「黒い一撃」(‘a black shott’)によって、魔女は猫に化け、また、猫に対して神が「黒い一撃」を与えることで、猫は魔女へと変わる。ここで魔女が言っている「神」(‘God’)は、魔界における神の可能性が高いだろう。

嵐をおこす猫と魔女

魔女がもたらす悪は、猫の仕業であるとされた。急に起こされる嵐は、出向した船が魚を殺さないように、という猫の陰謀と、敵の船を沈めようとする、魔女の陰謀などと言われることもあった。

ジェームズ一世 (在位：1603-1625) の船が転覆した際にも、悪魔が猫を使って嵐を起こさせた、といわれた。『スコットランド便り— 高名な魔術師 ドクター・フィアの忌まわしい生きざまを論じる』(*News from Scotland, Declaring the Damnable Life and Death of Doctor Fian, a Notable Sorcerer*) の中では、魔術師ジョン・フィアン (Doctor Fian, alias John Cunningham) が悪魔の命によって嵐を起こしたことが記されている (fig. 15)。



fig. 15

悪魔の一員に登録されていたフィアンは、ノース=バリック・カーク (North-Barricke Kirke) において、大勢の悪名高き魔女たちの前で幾度となく教えを説き、さらに、フィアンと魔女たちは、デンマークから戻る船上で、ジェームズ一世に魔法をかけ、溺れさせようと企んだとされた。フィアンが語るところによると、悪魔は、猫を連れて行け、と集會に集まった全員に命じた。その命令通りに、フィアンは猫を追いかけ、海辺に猫を追い詰めて、猫の力によって海上のジェームズ一世の船を転覆させたと告白している。自分の船を転覆させようとしたフィアンに怒り狂った、ジェームズ一世は、フィアンに激しい拷問を受けさせた。1591年、エジンバラのキャッスルヒルで、フィアンは、荷車に乗せられ喉を絞められ、あらかじめ用意された燃え盛る炎に放り込まれ、火あぶりにされた。²¹

乳首を多数もつ魔女

猫を連れていることが魔女の証拠であるとされていたが、魔女は子分を多く育てるために、多くの乳首をもつ動物、猫に姿を変えているという俗説が流布していた。多くの乳房をもつ雌猫は、魔女の体の変異のシンボルとなった。二つ以上の乳房は、魔女の証拠となり、迫害の対象となったのである。この俗説は長くヨーロッパ社会に根付いており、17世紀末の文学作品の中でも言及されている。ウィリアム・コングリーブ (William Congreve, 1670-1729) の戯曲『愛のための愛』(*Love for Love*, 1695) の第2幕では、アンジェリカが乳母に対し、「あなたの左腕の下に大きな不自然な乳首があるという証人をつれて来る」と、以下のようにからかっている。

Ang. [...] Look to it, Nurse; I can bring Witness that you have a great unnatural Teat under your Left Arm, and he another; and that you Suckle a Young Devil in the Shape of Tabby Cat, by turns, I can.

(William Congreve, *Love for Love*, p. 20)

猫を飼っている老婆が、それだけで魔女としてとらえられてしまっていたことは、後にジョン・ゲイ (John Gay, 1685-1732) が『老婆と彼女の猫たち』(*The Old Woman and Her Cats*) と題された寓話 (fig. 16) の中で次のように描いていることからもうかがえる。

About her swarm'd a num'rous brood

Of Cats, who, lank with hunger mew'd.

Teaz'd with their [= cats's] cries, her choler grew,
And thus she sputter'd 'Hence, ye crew!

Fool that I was, to entertain

Such imps, such fiends – a hellish train!

Had ye been never hous'd and nurst,

I for a witch had ne'er been curst.

.....
They stick with pins my bleeding seat
And bid me shew my secret teat.'

'To hear you prate would vex a saint;

Who hath most reason of complaint?

(Replies a Cat) Let's come to proof.

Had we ne'er starv'd beneath your roof,

We had, like others of our race,

In credit liv'd as beasts of chase.

'Tnfamy to serve a hag.

Cats are thought imps, her broom a nag[.]

(John Gay, 'The Old Woman and Her Cats', ll. 19-26, 33-42)



fig. 16

老婆は、自分が猫たちに餌を与えたりしなければ、魔女として呪われることはなかったはずだ、という。一方、猫たちのほうは、老婆の家で飢え、餌を与えられ、老婆に「小鬼」('imps) 「敵」('fiends) 「地獄の従者」('a hellish train) として扱われ、「悪霊に仕える不名誉」('infamy to serve a hag') を被っていると不満をもらす。猫を飼っているということで魔女の扱いを受ける老婆は、さらなる確たる証拠として、「自分の秘密の乳房を見せるよう命じられる」ことになってしまうという。このやりとりの中でも、猫が魔女の手先として認識

されていたこと、また、異常な乳房をもつ女性が魔女として迫害されていたことが示されている。

魔女の集会

魔女と猫が同一視されたのは、魔女も猫も集会を開くためでもあった。ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の戯曲『マクベス』 (*Macbeth*) は、魔女たちが王に呪いをかけるべく、集会を開いているところから始まる。3人の魔女のうち一人のグレイマルキン (Graymalkin) という名は、魔女が連れてくる灰色の猫の意を持ち、猫は予知能力も持っていたとされている。²² 魔女たちが再度集まり、「とらぶち猫がミャオと三度鳴く」(“Thrice the brinded cat hath mewed”, Act 4, Scene 1, line 1) 時に、時は満ちる。

エジプトにおいて、古くから月の象徴でもあった猫は、魔女たちの集会 (サバト) に取り入れられるようになった。サバトの参加者は猫などの動物をまねて仮装を行っていたが、式の長の装飾品や仮装などは、後に、キリスト教教会によって悪魔崇拝として弾圧される要因となった。1596年、アバディーンの魔女たちは猫の変装をし、フィッシュ・クロス (Fish Cross) で密かに祝宴を催したが、この集会が罪に問われることとなった。実は、魔女と思われていたのは、本物の猫で魚市場の魚の匂いにひかれるかのように集まっていたと考えられている。²³

IV. 黒猫の効用

生贄としての猫

猫の中でも、特に黒猫は、その黒色が闇に紛れることから、魔界や霊界に通じるものとされた。猫は、サタン化身である蛇と交流を持っているとも考えられた。²⁴ 猫がもつ予知能力を手にいれようと試みる人々は、夜行性の猫を生贄に捧げることで、暗闇や地下に住む神々と交渉をしようと試みた。

1750年頃までは、スコットランドなどのケルト文化が根付いていた場所を中心に、「タイエルム」(Taigheirm) と呼ばれる儀式が行われており、黒猫が生贄となっていた。²⁵ スコットランドの高地や島々に密かに住み着いたとされる神や悪霊は、ブラックキャット・スピリッツ (Black Cat Spirits) と呼ばれ、タイエルムの儀式を行うことで人々は悪霊の力を得ようとした。タイエルムは、「武器の貯蔵場所」という意に加え、「猫のなき声」をも意味する。儀式は真夜中に始まり、四昼夜に及ぶ。生贄の儀式を行ったものは、儀式が終了後に、生涯失うことはない、予知能力を授かるとも言われていた。黒猫は、魔法にかかりやすい状態にするために、猫に仕打ちや苦痛を与えられた。一匹の黒猫はくし刺しにされ、すさまじい鳴き声が響きわたる中、ゆっくりと火であぶられる。その黒猫が死に至り、鳴

き声が消えた後に、別の黒猫が串刺しにされ、悪魔払いの祈祷師の体力が続く限り、黒猫の生贄が途絶えないように儀式は進む。タイエルムが「猫の鳴き声」を意味することからわかるように、儀式の途中で悪霊が猫の姿になって表れた際には、串焼きにされた猫の鳴き声と悪霊たちの叫び声が、この世のものとは思えないほどのすさまじさで響きわたる。巨大な猫の霊が周囲を威嚇しながらやってくることでこの儀式は終わる。

黒猫は魔術的な、予知能力を求める魔術師たちに利用されると同時に、聖なる生き物としての生贄にもなった。ウェストミンスター寺院では告解の三が日に猫をむち打ち、殺すという生贄が行われていたようであり、寺院の東の一部が改修された際に、猫のミイラが見つかった。²⁶ 猫は生きたまま壁の間に閉じ込められ、キリストと同一視された太陽神に対する捧げものとして生贄になったと考えられている。

黒猫の薬用

悪魔としての猫と聖なるものとしての猫の二面性は、17世紀に入っても、毒と薬が表裏一体であることと同じく、医学的に利用された。トプセルによれば、猫の歯は毒性を帯びた液を分泌し、肉は有毒で、猫の毛は命を奪い、誤って毛を飲み込もうなら、窒息死する、というほどであった。

[. . .] it must be considered what harmes and perils come unto men by this beast [= cat]. It is most certain, that the breath of favour of Cats consume the radical humour and destroy the lungs, and therefore they which keep their Cats with them in their beds have the air corrupted, and fall into severall Hecticks and Consumptions. [. . .] The like may be said the flesh of Cats, which can seldom be free from poison, by reason of their daily food eating Rats and Mice, Wrens and other birds which feed on poison, above all the brain of a Cat is most venomous, for it being above measure dry, stoppeth the animal spirits, that they cannot passe into the ventricle by reason whereof memory faileth, and the infected person falleth into a pherenzie.

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 83)

猫は日々、野ねずみや家ねずみを食するため、猫の体は毒から逃れられないとトプセルは論じ、さらに、猫の脳が最も危険だとみなしている。しかしながら、猫の体そのものが毒であると認識される一方で、人間は猫の危険性やその毒性を把握し、猫を薬用として利用しようと試みていた。トプセルは次のように提案している。

[. . .] it appeareth that this is a dangerous beast, and that therefore as for necessity we are constrained to nourish them for the suppressing of small vermine: so with a wary and discreet eye we must avoid their harms, making more account of their use

then of their persons [= poisons?].

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 83)

その最たるものが、黒猫の頭部を煎じて薬にしようというものである。

For the pain and blindness in the eye, by reason of any skins, webs, or nails, this is an approved medicine; Take the head of a black Cat, which hath not a spot of another colour in it, and burn it to powder in an earthen pot leaded or glazed within, then take this powder and through a quill blow it thrice a day into thy eye, and if in the night time any heat do thereby annoy thee, take two leaves of an Oke wet in cold water and bind them to the eye, and so shall all pain flie away, and blindness depart although it hath oppressed thee a whole year: and this medicine is approved by many Physicians both elder and later.

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, pp. 83-84)

頭部に別の色の斑のない黒猫、即ち全身が黒い毛でおおわれている黒猫を手に入れ、陶器のつぼに入れて焼き、粉にしたものを目の中に一日 3 滴たらすと、盲目もしくは目の痛みが治る、というのである。黒猫の脳が薬に利用できるということは広く知られていたようで、例えばベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572- 1637) も魔女の一人に次のように言わせている。

I, From the jaws of a Gardineres Bitch,
Did snatch these bones, and then leap'd the ditch
Yet went I back to the house againe,
Kill'd the black Cat, and here's the brayne.

(Ben Jonson, *The Masques of Queens*, ll. 123-126)

黒猫の頭部は、魔除けやまじないをする際の道具として認識されていた。このように、黒猫たちは、予知能力を得ようと試みる魔術師たちや、猫の体内から医学的な作用を取り出そうとする人間たちの犠牲になった。

V. 猫の復権

17 世紀以前のヨーロッパ社会では、人間こそが世界の中心であり、動物が人間の下位に存在するため、被造物である自然は理性をもたず、人間は被造物を利用して良い、という

考え方が主流であった。だが、18 世紀に入ると、哲学者ジェレミ・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) が 1780 年に以下のように唱え、動物をめぐる概念を変化させた。

The question is not, Can they [=animals] reason? nor, Can they talk? but, Can they suffer? Why should the law refuse its protection to any sensitive being?

(Bentham, p. 311)

理性やロゴスを持たないという理由で、動物が苦しみを感ぜないわけではない、というベンサムの主張は、詩人たちの共感を呼び、ロマン派の詩人たちを始めとする多くの作家が、動物や自然を芸術の対象へと高めていった。

また、19 世紀に入ると、王立協会の外国人研究員であった、ルイ・パスツール (Louis Pasteur, 1822-1895) によって細菌と疾患の因果関係が示され、どぶねずみを退治する猫の名声が増した。また、科学技術の発達により、産業革命を経て、動物は労働力ではなくなった。ヴィクトリア朝時代においては、都会で暮らす人々が猫をペットとして動物を愛玩するようになり、ようやく猫たちは現在のような権利を獲得した。

ねずみ捕りの能力をかわれて家畜化された猫たちは、神として崇められ、悪魔として虐待された時を経て、詩人たちによって、その愛らしさが賛美されたり、猫が主人公になる物語が作られるようになった。次号に掲載予定の論考では、18 世紀以降のイギリスにおいて、猫がどのように文学で描かれていったかを見ていくことにしたい。

注

¹ 本論は、広島大学・徳島大学・山口大学主催の次世代研究者育成プログラム「未来を拓く地方協奏プラットフォーム」のラボ・ローテーションの一環として、コンソーシアム活動経費にて島根大学にて訪問研究を行った（平成 28 年 10 月から平成 29 年 3 月）成果の一部である。この訪問研究では、ラフカディオ・ハーンの表現の中に見られる、山陰に根付く文化とハーンの故郷であるアイルランドの文学との関係の考察や、明治期の日本で外国文学がどのように受容されたか、更に、日本の文化がハーンを通してどのように翻訳されたかに関して、考察を行った。本論は、その中でも、文学作品に描かれる猫の表象に焦点をあてたものである。共同研究の申し出を受け入れてくださった、島根大学教育学部の縄田弘幸教授とコンソーシアムに感謝を申し上げる。また、本論は、「本の学校」今井ブックセンターで開催された、第 15 回「文藝学校」講演会における筆者の「あなたの知らない猫の世界 ―猫と英文学、猫とヒトの時空間」と題された講演（平成 29 年 7 月）及び、福岡県北九州市のラジオ局 FMKITAQ で筆者がパーソナリティを務めた「ネコと文学、ときどき音楽」（平成 29 年 6-8 月、全 13 回）の講演の一部である。また、本論中の下線部はすべて筆者による。

2 『知られぬ日本の面影』の中でハーンは「男の子も女の子もみな猫の足跡と梅の花を比べて読んだ詩を知っている」(‘Every boy and girl knows the verses comparing the print of cat’s-feet on snow to plum-flowers’, Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*. p. 458) といひ「初雪や 猫のあしあと 梅の花」という俳句にも言及している。

3 平川佑弘訳、小泉八雲、『光は東方より』、314-315 頁。

4 ハーンが日本に滞在した際には、日本での化け猫騒動は Lord Redesdale によって *The Vampire Cat of Nabeshima* として英語で紹介されていた。猫股と化け猫の伝説については、次号に掲載予定の論考で紹介したい。

5 ラリーを始めとする猫の公務員たちは、twitter のアカウント (<https://twitter.com/number10cat>) を持ち、首相官邸の情報を発信する役割も担っている。捕獲長のラリーは外交にも参加し、オバマ大統領とキャメロン首相の対談の際にも立ち会っている。

6 ウルジーの出身地である、イプスウィッチ (Ipswich) の町にはウルジーと猫の銅像 (fig. 17, fig. 18) がある。



fig. 17



fig. 18

7 ラリーとパーマストーンとの闘いは BBC などでも放送されることもある

(<https://www.youtube.com/watch?v=OtlpCoBkvWI> 参照)。また、道端に寝転ぶラリーの職務怠慢の様子は、キャメロン首相に似たのではないかと揶揄された。

8 17 世紀のイギリスの動物学者エドワード・トプセル (Edward Topsell, 1572-1625) が書いた『四足獣の歴史』(*The Historie of Four-Footed Beasts*, 1607) の中でも次のように言及されている。

The nature of this beast [= cat] is, to love the place of her breeding, neither will she tarry in any strange place, although carryed far, being never willing to forsake the house, for the love of any man and most contrary to the nature of a Dog, who will travaile abroad with his master; and although their masters forsake their houses, yet will not these beasts bear them company, and being carryed forth in close baskets or sacks, they will yet return again or lose themselves.

(Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 81)

⁹ラリーをめぐるキャメロン元首相の動向はインターネット上で話題になることも多く、イギリスの国会の答弁の中で、キャメロンは以下のようなスピーチを行っている。(http://www.cbc.ca/news/trending/larry-the-10-downing-street-cat-is-staying-1.3677276などを参照。)

It gives me the opportunity to put a rumour to rest as well, even more serious than the Strictly Come Dancing one – you’ll appreciate this because El Gato, your cat, is particularly famous – the rumour that I somehow don’t love Larry. I do and I have photographic evidence to prove it. Sadly I can’t take Larry with me, he belongs to the house and the staff love him very much – as do I.

¹⁰ イギリス政府はこの愛護団体から多くの猫を引き取り、ねずみ捕獲の任務を命じている。キャメロン首相が団体を訪れた際にはニュースにもなっている。(https://www.gov.uk/government/news/battersea-dogs-cats-home-david-cameron-meets-1000th-volunteerなどを参照。)

¹¹ 『アダムとイブ』に描かれている猫とイブの関係については Gettings, pp. 184-185 を参照。

¹² Boylan (ed.) *The Literary Companion to Cats*, p. 5: ‘Dwellers in a house where a cat has died a natural death shave their eyebrows [. . .] Dead cats are taken away into sacred buildings, where they are embalmed and buried, in the town of Bubastis; bitches are buried in sacred coffins by the townsmen, in their several towns. (Herodotus, ‘What Happens to Cats’) 参照。

¹³ Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 81: ‘The *Egyptians* have observed in the eyes of a Cat, the encrease of the Moon light, for with the Moon they skin more fully at the full, and more dimly in the change and wane, and the male Cat doth also vary his eyes with the Sun; for when the Sun ariseth, the apple of his eye is long; toward noon it is round, and at the evening it cannot be seen at all, but the whole eye sheweth alike.’などを参照。太陽と月の光が猫の目に入り込むモチーフはウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) の「猫と月」(‘The Cat and the Moon’) と題された詩の中などでも描かれている。猫の目の描写における英文学と日本文学の比較は次号に寄せることにしたい。

¹⁴ Howey, p. 17 を参照。

¹⁵ Clutton-Brock, p. 36 を参照。

¹⁶ Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 80 及び Howey, p. 3 を参照。

¹⁷ Topsell, *The History of Four Footed Beasts*, p. 80: ‘in the dayes of King Ptolemie, [. . .] the Roman Ambassadors remaining still in Egypt, it fortuneth that a Roman unawares

killed a Cat, which being by the multitude of the Egyptians espied, they presently fell upon the Ambassadors house, to rase down the same, except the offender might be delivered unto them to suffer death: so that neither the honour of the Roman name, nor the necessity of peace, could have restrained them from that fury, had not the King himself and his greatest Lords come in person, not so much to deliver the Roman Cat-murderer, as to safegard him from the peoples violence.' 及び Howey, p. 33 を参照。ローマ人がエジプトで猫を殺したことでエジプトの民衆から殺害された事件は、20 世紀に入ってから、H. C. ブルック (H.C. Brooke) の「一匹のアビシニアン・キャットに捧げる詩」(‘Lines to an Abyssinian Cat’, 1925) と題された詩のなかで次のように表現されている。

Egypt fell

On evil days: the Roman Eagles waved
Their threatening pinions o'er Nile's yellow sand –
'Gainst Thee the Roman raised an impious hand –
Not yet, not yet, was Egypt's spirit dead!
The Roman slew a cat! Athirst for blood –
Forgotten dread of Rome – the swarthy mob
Poured, howling vengeance, from each alley – way –
And the proud Roman knew the taste of death –
For he had slain a Cat! . . . Far, far away
Are now those Pagan days! O'er all our heads
Civilisation's blessing freely pour;
O Bast, look downward through the centuries,
And see thy Children!

18 生きた猫を盾に縛り付けて戦ったという説と、兵士たちの盾に猫の姿を描いたという説などがある。戦いの後、カンピュセス 2 世は、聖なる動物のために国を犠牲にしたエジプト人を軽蔑し、エジプト人たちの顔に猫を投げつけたと言われている。Morris, p. 163 を参照。

19 猫をつれた魔女の魔女裁判については、Gettings, pp. 163-165, Clutton-Brock, p. 55 を参照。

20 スコットランドにおける魔女裁判については、Howey, pp. 90-93 などを参照。

21 James Carmichael, *News from Scotland, Declaring the Dammable Life and Death of Doctor Fian, a Notable Sorcerer, Who was Burned at Edenbrough in January Last* (1591), sig. B. ii.- B. ii. v : ‘Wherevpon hee was put into a carte, and beeing first strangled, hee was immediatly put into a great fire, being readie prouided for that

purpose, and there burned in the Castle hill of *Edenbrough* on asaterdaie in the ende of Ianuarie last past. 1591’.

²² Kenneth Muir, *The Arden Shakespeare: Macbeth* (Methuen: London, 1951) p. 4: ‘Grimalkin, a grey cat; with the toad, a common witches’ familiar’ を参照

²³ Howey, pp. 88-89 を参照。また、ハーウェイによれば、黒猫もまた、魔女の集会に出席すると広く信じられており、猫の尻尾を切ると猫が女主人の魔女と出かけられなくなると考えられていた。そのため、村人たちは慣習として猫の尻尾を切ったという。冒頭で述べたように、猫の尻尾を切る風習や伝説は日本にも長く伝えられていた。猫の尻尾をめぐつては次号に寄せることにしたい。

²⁴ トプセルは、猫と悪魔について次のように論じている。

Some say there is a kind of loue betwixt Serpents and Cats, whereof I finde this storie in *Ponzettus*. There were certaine Monks, who all of them fell sicke vpon a suddaine, and the Phisitians could not tell how or whence this sicknesse came, except from some secrete poyson. At last, one of the seruants of the Abbey, saw the Cat which was dailie fedde at the Monks table, to play with a serpent; and thereby it was coniectured, that the serpent hauing in his sport, lost or left some poyson vppon the Cats skinne, the Monkes by stro|king of the Cat were infected there-with. And the cause why the Catte was not harmed thereby, was for that shee receiued the poyson from the sport, and not from the anger of the serpent.

(Topsell, *The Historie of Serpents* [1608], pp. 39-40)

この文献は17世紀のイングランドの作家たちにも多く読まれていたようで、例えば、ジョン・ウェブスター (John Webster, 1580-1634) の戯曲『白い悪魔』(*The White Devil*) の中でもトプセルの記述が基になった表現が見出せる。*The Selected Plays of John Webster*, John Dollimore and Alan Shieled (Cambridge: CUP, 1983). p. 82, note 219: ‘Webster’s probable source is Topsell’s *History of Serpents* (1607-8)’ を参照

²⁵ タイエルムの儀式については、Howey, p. 115 を参照。ヨーロッパでは黒猫が生贄になることが多く、ベルギーのイーペル (Ypre) では黒猫をマルクト広場に面した繊維協会ホールの塔から投げる伝統があった。イーペルでは繊維業が盛んで、ウール製品を冬のあいだ保管しておくために、ねずみなどの害獣を駆除する猫が重宝されていたが、中世に入り、猫がペストを媒介するという風説が流布し、猫の数を減らすために猫を塔から投げたと考えられている。この慣習を反省し、過去の過ちを繰り返さないために、3年に一度、猫投げ祭が行われている。現在投げられているのは、生きた黒猫ではなく、黒猫のぬいぐるみである。

²⁶ 壁の中の猫のミイラについては、Clutton-Brock, p. 57 を参照。

参考文献

- Anon. *The Wonderful Discoverie of the Witchcrafts of Margaret, and Philip Flower, Daughters of Joan Flower Neer Bever Castel*. London, 1619.
- Bentham, Jeremy. *An Essay on Jeremy Bentham*. Strossmere Books, 2010.
- Bovet, Richard. *Pandaemonium, or The Devil's Cloyster Being a Further Blow to Modern Sadduceism, Proving the Existence of Witches and Spirits*. London, 1684.
- Boylan, Clare. *The Literary Companion to Cats*. Sinclair-Stevenson: London, 1994.
- Carr, Samuel (ed.) *The Poetry of Cats*. London: Chabcellor, 1991.
- Carmichael, James. *Newes from Scotland Declaring the damnable life of Doctor Fian a Notable Sorcerer, who was Burned at Edenbrough in Januarie last*. 1591. London, 1592.
- Clutton-Brock, Juliet. *The British Museum Book of Cats*. British Museum: London, 1988.
- Congreve, William. *Love for love: a Comedy: Acted at the Theatre in Little Lincolns-Inn Fields by His Majesty's Servants*. London, 1695.
- Ennemoser, Joseph. *The History of Magic*. 1854.
- Gay, John. *The Fables of John Gay*. London, 1889.
- Gettings, Fred. *The Secret Lore of the Cat: The Magic of Cats in Myth, Legend and Occult History*. London: Grafton Books, 1989.
- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan. Vol. 2*. Cosimo: New York, Tuttle: Vermont, 1964.
- Hutchinson, Francis. *Historical Essay*. London, 1718.
- Howey, M. Oldfield. *The Cat: In the Mysteries of Magic and Religion*. Castle Books: New York, 1956
- Jonson, Ben. *The Masque of Queenes Celebrated from the House of Fame*. London, 1609.
- Klingender F. *Animals in Art and Thought to the End of the Middle Ages*. Routledge: London, 1971.
- More, D. D. *Antidote against Atheism*. 1600.
- Morris, Desmond. *Catlore*. Crown: New York. 1988.
- Muir, Kenneth. *The Arden Shakespeare: Macbeth*. Methuen: London, 1951.
- Petto, Samuel. *A Faithful Narrative*. London, 1652.
- Scott, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. London, 1584.
- Scott, Walter. *Letters on Demonology and Witchcraft*. London, 1831.
- Topsell, Edward. *The Historie of Foure-Footed Beastes Describing the True and Lively Figure of Every Beast*. London, 1607.
- . *The Historie of Serpents. Or, The Second Booke of Liuing Creatures Wherein is*

Contained Their Divine, Naturall, and Morall Descriptions. London, 1608.

Webster, John. *The Selected Plays of John Webster, John Dollimone and Alan Shieled.*
Cambridge: CUP, 1983.

小泉八雲『光は東方より』平川佑弘訳、講談社学術文庫、1999年。

(まつもと まい、広島大学大学院文学研究科助教)